

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

# 文化通心

B U N K A T S U S H I N

2019冬 No.104



## 和久傳ノ森の安野光雅館

財団の友の会「晴友会」の皆さんと1泊2日の研修旅行に行ってきました。  
日頃、財団の公益活動を影に日向に支えて下さる皆様と、今回は少しお茶を離れて、  
天橋立や伊根の舟屋を廻りました。安藤忠雄氏の建築による美術館をバックに記念撮影。

- 第5回 あ・うんの数寄講座 その二  
茶の湯をさらに楽しむ夏期講習

- 晴松亭だより

12月から2月までの茶華道情報／財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団  
〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号  
TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212  
2019年冬号 No.104 12月1日発行(季刊)

# 茶の湯をさらに楽しむ夏期講習

今年の夏季講習は、近代数寄者についてさまざまな観点から俯瞰するような夏季講座となりました。明治から昭和初期に活躍した財閥系の数寄者達は、期せずして茶の湯の中心となりました。そして外国に流出しそうな我が国の文化を守る役割を積極的に果たしました。

第4回 8月18日(日)

## 「近代の茶道と盆栽

「美術」との関係から

講師 依田 徹 (遠山記念館学芸課長)

講師の依田氏は東京芸大美術研究科で芸術学を専攻した美術博士です。

2009年からの3年間はさいたま市大宮盆栽美術館で学芸員を務めており、現在専門としている茶道のお道具と盆栽の歴史的美術価値を日本近代史の中で比較されるという興味深い講座でした。日本近代美術史と銘打った書籍に盆栽の写真はほとんど取り上げられていません。

平安時代に中国から伝わった茶の知識は平安時代に茶を飲む習慣と製法がもたらされ鎌倉時代に茶の栽培が普及し茶を飲む習慣が一般的に広まり鎌倉中期には

中国の茶器が輸入され、茶会が開かれるようになったとされています。そして現在につながる茶道が確立したのが安土桃山時代です。

しかし江戸時代前期までは主に大名、豪商など限られたものであったとされています。

一方盆栽も平安時代に唐で行われていた盆景が伝わったとされ、鎌倉時代には武士階級の趣味として広く普及していました。江戸時代になると盆栽の栽培や園芸が盛んになり、浮世絵にも盆栽が描かれていたものもあります。

この時代に蛸作りという特殊な様式が登場し枝を曲げ、肥料を注ぎ、枝先まで曲げて染付けの鉢に植え付けるといふ、すべてが人工美の世界でした。明治初期まではこれが園芸会の主流で明治10年の第一次内国勸業博覧会に出品された盆栽を見てアメリカの動物学者であるエドワード・S・モースが「怪奇きわまる」と感想を述べるほどある意味完成されて

いたと思われます。

その後、旧土佐藩主の山内容堂が関西風の盆栽を東京に持ち込み、木戸孝允が鈴木孫八という植木屋を後援し、近代盆栽の筆頭となる「香樹園」という園号を与えます。香樹園は蛸作りを廃していき、現在の盆栽の流れを形成していきます。

明治初期の茶道は明治維新によりそれまで天皇家での宮中行事であった口切茶が慶応3年になくなり、明治20年の京都御苑で開催された博覧会での献茶まで途絶えましたが、そこで用いられた天目は視覚的に天皇の権威を示すものが製作されました。

明治21年竣工の「明治宮殿」には生け花の変わりに盆栽が飾られ、明治天皇は茶花よりも盆栽を好んでいたことが何われ愛好家の筆頭とされています。

双方とも愛好家には著名な方々が名を連ねますが、なぜ近代美術史での取り上げ方に大きな差が出てきたのでしょうか。

明治に出版された美術史書には茶道具の掲載はまだ少なく昭和2年の帝国美術博覧会に美術工芸部が設置されるまで茶道具も美術品という扱いでは無かったと推測されます。

しかしその後全15巻からなる昭和11年発行の茶道全集で美術品としての地位を確立したといわれています。

その反面盆栽は日清戦争以後それまで流行していた中国趣味が下火となり昭和初期にかけて座敷の飾り付けが茶道、華



道など日本文化的要素の強いものに変化していきます。

明治22年に盆栽専門誌が刊行され、大正9年には大日本盆栽奨励会が発足し、翌年には機関紙も刊行されます。昭和9年には第一回「国風盆栽展」が開催され同年発足した国風盆栽会の初代会長に松平十二代当主松平頼寿が就任しました。それ以後も盆栽は粋な趣味でしたが培養管理、育成には手間や年数がかかり生活環境の変化により愛好者は時間的に余裕のある熟年層が多くなり一般的な嗜好から外れていきましたが樹齢数百年の名盆栽と言われる逸品も存在しています。しかし盆栽は現代においても美術館と称する施設が存在するものの社会的に「美術品」と評価されてるとはいえない状況だということです。

この講座を聞いて思ったのは盆栽はやはり生き物であるということでした。常に成長し変化する、そこそが盆栽の魅力であると思えました。パンダであり、豹であり、美しい生き物はどれだけ魅力

的であっても美術品では無いのではないかということです。存在そのものに価値がある工芸品と一瞬一瞬を愛でることのできる生物、どちらも魅力的で感動を与えてくれる芸術だと思います。

昨今の盆栽ブームを松平頼寿公は目を細めて微笑んでおられるかもしれません。(香川二郎)

第5回 8月25日(日)

## 「近代数寄者の茶道」

平瀬露香、益田鈍翁、

松永耳庵の茶人人生から

講師 岡田直矢 (茶道研究家)

講師の岡田直矢先生は日本銀行金融研究所 歴史研究課におられ、名物茶道具が大好き。盛りだくさんな内容と想いの詰まった講義をして下さりました。

近代数寄者は、明治維新の頃から昭和の激動の時代の財界のリーダー達。彼らは名物茶道具や美術品を収集し、お茶を楽しましました。改めて考えてみると、その事自体が実は凄い事だと思えます。

江戸から明治の世になって、珍しい西洋文化がバンバン入って来る中で、彼らはなぜお茶をしてくれたのか？ 日本の文化財を守るといふ志、ビジネスで世界と渡り合った人たちだからこそ、自国の文化に誇りを持つ事の大切さを知って

たのかもしれないが、同時に茶の湯そのものが楽しかったのだと思うのです。

高級腕時計コレクターの友人に、そんなにいっぱい腕時計持ってどうするの？ って聞くと、夜中に引出しを開けて眺めてニヤニヤしていると云ってました。それもたしかに幸せそうで良いのですが、茶の湯で良い茶道具を手に入れた時は、お披露目したくなるでしょう。そこから財界人同士の交流が生まれ、それが日本の経済発展に寄与したのかもしれない。私の勝手な想像ですが、名物道具の所持を目指して財界の人達が切磋琢磨する様は、戦国武将さながらの様に思えます。

平瀬露香は、「上方の粹の神」とも呼ばれる多芸多才な文化人。特に茶道・能楽の発展に貢献、武者小路千家の家元後見人を務めた人物として知られています。

益田鈍翁は、三井物産や日経新聞を設立し、草創期の日本経済を動かした実業家。茶道具や古筆などの美術品の蒐集を趣味とした事でも知られています。「千利休以来の大茶人」とも称され、その影響力は絶大だった事でしょう。

松永耳庵は、「電力王」「電力の鬼」と言われた人。美術コレクターとしても知られ、原三溪、益田鈍翁とならび小田原三茶人と称された一人。そのコレクションを東京国立博物館に寄贈したり、松永記念館に展示し、名物道具などの公開性により広がりを持たせたと言えます。

近代の日本を担う財界の指導者達の間

で広まった茶の湯は、流派にこだわりが無く、また主茶碗は高麗茶碗が好まれるなど、どちらかと言えば桃山時代の豪商、今井宗久や津田宗及よりだったそうです。

かつて山上宗二は茶人を、「名人(仁)」、「茶の湯者」、「(わび)数寄者」に分類していますが、近代・現代においては、その分類に疑問を感じる時があります。わび数寄は本来、高価すぎる唐物に対して今焼の楽茶碗や竹の花入といった、安いけど趣のある道具を用いるとされていましたが、近代ではやっぱり高価ですし、唐物や高麗茶碗と共にそれらも好んだ近代数寄者は、その時代に新たに登場した、新しい茶人だったのではないでしょうか。

破天荒だと思われる人も居るでしょう。しかしその茶風は、気の合った財界の有力者たちを茶事・茶会に招き、客に招かれた人たちが、茶の湯の魅力にまた引き込まれるという、実に面白く、茶の湯にとつてはとても嬉しい連鎖をもたらしました。そしてそれは、日本各地の茶の湯の発展にもつながります。

財界の有力者が茶の湯に没頭するのを、地方の有力者達が放つてはおかないからです。で、日本各地のモツタさん達が茶の湯に傾倒しました。近代数寄者達の茶の湯における功績の一番目は、そんな羨ましい環境(時代)を作り出した事だと思えます。今回の講演で取り上げられた前述の三人の近代数寄者は、献茶↓

大寄せ茶会↓美術館と、名物道具をより多くの人が鑑賞出来るようにと、さらに一歩先行く茶の湯を創り出したのです。

三人合わせて幕末から第二次大戦後の百年間は、茶の湯にとつて良い環境とは言えないようにも思います。千利休の時代もそうですが、そんな時代にこそ発展する茶の湯のチカラ、それが茶の湯を学ぶ意義のひとつだと感じています。そして、千利休も露香も鈍翁も耳庵も、激動の時代の大きなうねりをプラスの力に変える事が出来る人として、歴史に登場したのだ、とも思いました。

茶の湯が衰退しつつあるのを肌で感じる今日この頃。お茶会で写真を撮る人をよく見かけるのも、「インスタ映え」が流行語になるのも、公開性、大衆化という流れはまだまだ進んでいるのですね。

それが良いんだか悪いんだかはさておき、たとえばそれを茶の湯の発展に繋げて行くスゴイ人が、そろそろ登場する時期に差し掛かっているのかも知れません。(原 大策)



# 晴松亭だより

財団の茶室、美藻庵・晴松亭は、平成9年に、京都数寄屋研究所・心傳庵の木下孝一棟梁が建てて下さいました。「茶事から大寄せの茶会まで対応できる貸し茶室」というのがテーマでした。近年、茶の湯の環境も大きく変わり、大寄せの茶会のニーズは減少傾向にあります。財団の月釜も「五人様茶会」で、濃茶席、薄茶席、点心席といった茶事に準拠した少人数の茶会が中心となっています。貸し茶室としての利用は、今のところ各流派のお茶の稽古場としてというのが中心ですが、今後財団では、もっと個人的な茶事や茶席の場としてご活用いただきたいと願っております。お茶室は、小間の美藻庵、晴松亭の広間や立礼席は、それぞれ分割してご利用頂けるシステムです。具体的な利用の方法については、ぜひ事務局までご相談下さい。この度は、そうした貸し茶室の活用事例のひとつとして、裏千家の高橋宗明先生の社中の皆さんが主催されたお茶会の様子について、ご寄稿いただきました。



## 虎希の祝いの茶事

十月八日、その日はちょうど晴友会の京都、丹後への研修旅行の日。私達、高橋宗明社中が晴松亭をお借りして、先生の古希のお祝いの茶事を催したのはそんな秋の一日でした。

半年前になるでしょうか。高橋先生が今年、古希を迎えられると知った社中の一人が、私達で茶事を催してお祝いするのはどうか……と言い出したのです。何ということ!! 一体、何をどうして決めるの? 第一どこで? 果たして自分達だけで茶事ができるの? など、稽古に通っているものの、毎回おぼつかない手

つきで点前を習っている私にとっては、茶事という言葉が別世界の出来事のように思えるのでした。

まず、いつ、どこで? の話になりました。私達の大好きな「月に一度の喫茶室」の中條文化振興財団の広間をお借りしよう、と即、意見は纏まり、時は十月、私達の稽古日である火曜日に決まりました。

春の終わりに、各々が手持ちの道具を持ち寄ったの道具合わせと相成りました。風炉釜、風炉先屏風、軸、花入れ……と次々に決まってゆく様はまるでオーケシヨンのようです。誰が決めるのでもなく、お祝いに相応し



い道具が選ばれてゆく様は、私には不思議でもあり楽しくもありました。松花堂の器に合わせて料理とお菓子の担当も決まり、そこで夏を迎え、茶事の話は暫くお休みとなりました。

九月の声を聞くと早くも一か月前。先生に案内状をお出しし、社中の皆が料理やお菓子を試作を重ねて、いよいよ前日となりました。心配した花も、大ぶりの一本の水引草を軸に、皆で投げ入れた九種の秋草が、大きな手付籠と見事な調和を見せてくれ、私達の大舞台はついに本番を迎えました。しつとりと落ち着いた



秋の日、晴松亭での祝いの茶事はスタートです。待合の掛け物は「無」。独特の味わいの書は高橋一夫氏の作。待合の煙草盆の横にはヒマラヤ杉の杉ぼっくりが添えられて。本席の琵琶床には源内焼のりっぱな獅子舞の香炉。床には百の福と百の寿の篆書体文字が並んでいます。風炉先屏風には野に揺れる白萩が一面に。香炉の獅子と屏風の萩は古代緑青で一体となり、茶室は秋の空気に包まれています。

先生へのお祝いの挨拶の後、自慢の？懐石料理が始まりました。鯛の昆布。鱈の西京焼き。鶏つくねとふっくり煮詰められた大根。ささげ入り赤飯。豊富な具入りの蓮根真薯にはあしらいの海



老。各々が心を尽くして作った品々は味わい深い美味しきでした。

「どれも皆、美味しくてきているわ！ 本来、懐石は家庭料理であって、特別豪華な食材を使った今の懐石料理とはちがって簡素なものだったのよ」との先生のお話に、私の懐石料理の敷居がほんの少し下がった様な気がしました。

客側四名、亭主側三名の設定で進める茶事ではありましたが、料理は皆一緒に広間で頂き、濃茶、薄茶は、

お点前を四人が代わり合って全員が頂く趣向でした。

初炭手前も終わり、生菓子が運ばれて来ました。緑高を開けると淡い赤色が見え隠れする練切の長命菊。もちろん手作りです。甘味

をおさえた上品なお味で、甘党ではない先生も「とっても美味しい。」と召し上げられました。

お菓子に目のない私達も幸せになつての中立ちです。お庭は朝の穏やかな雨で静かな緑となり、私達のざわめいた気分を穏やかにしてくれました。

後座での濃茶茶碗は黒楽と金継ぎ赤楽。十月には侘び物を……のように、個々に持ち寄った道具類がびつたりと調和しています。元々家に

あった茶碗、茶入、友から頂いた水指、心がときめいて買った思い出の茶碗など、それぞれの伝来の話にも心はほっこりです。思い入れの道具が今、ここに活かされている、そんな気がしました。

じっくり濃茶を味わった後の薄茶の干菓子はお浜。七宝模様の丸盆に載っています。木彫、塗りは共に社中の手によるもの。これは今回の私達から先生への記念の品でもありません。二服目の菓子は、黒の菊溜塗りの上の真赤な包みのチョコレート!! それらを渋い唐津碗と現代のカラフル碗で頂く、という楽しく、贅沢この上ないお茶事となりました。

無事終了! のこの時点で、今度は先生からのサプライズがありました。○△□が墨で描かれた扇子の私達へのプレゼントです。一つとして同じ形はなく、各々が「私のが一番!」と自慢し合った程です。今日一日の茶事の記憶は、私達の心に深く刻まれ、このお扇子と共に、決して忘れることはないでしょう。

今回は、六名の社中それぞれが自分の役どころを心得て、宗明先生へのお祝いの気持ちを茶事という形で表現できたのではないかと思っております。これで今晩はぐっすり眠れる!! とホッとした私の耳に、「これで次には茶事のお稽古ができるわね。」と、先生の一言。(水谷好子)



## ほどよい甘さがうれしい季節です

コタツの恋しい季節になりました。温かい日本茶のお供に愛媛県大洲市の郷土菓子『志ぐれ』はいかかですか？

『志ぐれ』は江戸時代中期、18世紀初めより大洲藩の江戸屋敷内の秘法菓子と伝えられています。

小豆ともち米、肱川の良質の水を材料に、小豆を炊いて砂糖蜜に一昼夜を漬け込み、うるち米を合わせて生地を作りセイロに流して蒸し上げたお菓子です。

特殊な材料を使うわけではありませんが、他の棹物和菓子にはなかなかない弾力に富んだ食感と、適度な甘さが特徴です。大洲市内でも複数の和菓子店が製造していて、それぞれのお店で、味が濃く風味が豊かなもの、あっさり目で後味のよいもの、粒の食感の強いものなどの特徴があり、最近では抹茶や栗、黒ごま、ゆずなどを加えて風味を変化させたものや、竹の皮でくるんだもの、一口サイズにカットして包装したものなども作られているようです。

『志ぐれ』の由来は小豆を、晩秋から初冬にかけてばらばらと通り雨のように降る時雨に見立ててこの名前がついたと言われています。

元来ほどよいときに降る雨という意味の時雨、来年はほどほどな天候を願います。



## お茶の風景(6)

## 茶会の生菓子

昭和の経済高度成長時代は女性の社会進出が目覚ましく、結婚前の娘さんの多くはお勤めに行き、また、その大半が退社時間後に習いものに通うというパターンが定着しました。中でも、お嫁入り前のたしなみとして茶華道に人気が集まり、ケーキやアイスクリームに馴染んだ現代っ子の娘さんたちにとって古くて新しい甘さ、季節感あふれる美しい生菓子がお稽古の楽しみだったようです。

財団主催の「若人茶会」では、毎年、三友堂の大内英生さん指導のもと生菓子を自作し、お茶を自服する席が人気を博しています。今年のそれは、緑あざやかな裏ごし餡を、あずきの餡玉にお箸でふんわりとつまみ付けたキントン。若葉の季節にふさわしく「新緑」と銘名された自作のお菓子は、いつもに増しての美味だったと、ご好評の声をたくさんいただきました。

茶道具に取り合せた茶会の主菓子は趣向を語らせる繊細な花鳥風月、席中で菓子名やご製の店名がご披露されます。



## 財団行事予定(12月~2月)

## 12月

## ◆書道教室

毎月第1・第3金曜日 森本義人先生  
12月6日・20日(金)午前10時~12時

## ◆和菓子講座

毎月第2金曜日 高橋初乃先生  
12月13日(金)午前10時~12時

## ◆ヤングヤング(子供茶の湯教室)

毎月第2・第4土曜日 山下純子先生  
12月14日・28日(土)午後1時~

## ◆月に一度の喫茶室

毎月第3火曜日  
12月17日(火)午前10時~午後3時迄  
自由なお時間にお出掛け下さい。  
ランチは要予約です。

## 1月

## ◆初釜

武者小路千家の三好先生が點初のお席を設けてくださることになりました。「三好社中として14年ぶりの初釜です。皆様のご多幸をお祈りし、縁起の良いしつらえでお待ちしております」

と席主からのメッセージと合せてご案内いたします。

好例の福引もお楽しみに。

日時 1月5日(日)

処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)

席主 武者小路千家 三好宇太郎

茶席 濃茶・薄茶・点心席

会費 8,000円

入席時間ご案内(各席15名)

第1席 9時

第2席 9時50分

第3席 10時40分

第4席 11時30分

第5席 12時20分

第6席 13時10分

第7席 14時

第8席 14時50分

各席2時間30分を予定

## ◆和菓子講座 高橋初乃先生

1月10日(金)午前10時~12時

## ◆ヤングヤング(子供茶の湯教室)

山下純子先生

1月11日・25日(土)午後1時~

## ◆書道教室 森本義人先生

1月17日・31日(金)午前10時~12時

## ◆月に一度の喫茶室

毎月第3火曜日

1月21日(火)午前10時~午後3時迄

自由なお時間にお出掛け下さい。

ランチは要予約です。

## 2月

## ◆懐石講座 三友居 山本勝先生

2月4日(火)午前11時・午後3時

## ◆書道教室 森本義人先生

2月7日・21日(金)午前10時~12時

## ◆ヤングヤング(子供茶の湯教室)

山下純子先生

2月8日・22日(土)午後1時~

## ◆和菓子講座 高橋初乃先生

2月14日(金)午前10時~12時

## ◆月に一度の喫茶室

毎月第3火曜日

2月18日(火)午前10時~午後3時迄

自由なお時間にお出掛け下さい。

ランチは要予約です。

**表千家同門会香川県支部 TEL (087) 845-4638**

- 12/1 東讃四季茶会 席主：吉川宗照  
中條文化振興財団 700円 9:00～15:00
- 2/9 東讃四季茶会 席主：谷本宗由  
中條文化振興財団 700円 9:00～15:00
- 3/1 茶の湯文化にふれる市民講座  
講師：千里金蘭大学名誉教授 生形貴重  
高松市生涯学習センター 無料 12:00～15:00

**香川大学表千家流茶道部 TEL 090-5917-1085**

- 12/15、1/19、2/16 月釜 龍光塾 500円 10:00～14:00

**琴平月釜茶道会 TEL (0877) 58-9551**

- 12/7、8 第47回琴平町歳末助け合い  
席主：武者小路官休庵 山下教子・竹井恵子  
町総合センター 300円 10:00～15:00

**茶道裏千家淡交会香川支部 TEL 090-4337-1280**

- 12/8 坂出分会 月釜 席主：常盤宗春  
翠松閣 500円 10:00～14:00
- 12/8 多度津分会 月釜 席主：柏 宗昌  
総合福祉センター2F 500円 10:00～15:00
- 12/15 丸亀分会 丸亀城石垣修繕チャリティー茶会  
席主：丸亀分会  
生涯学習センター 500円 10:00～15:00
- 1/19 坂出分会 月釜 席主：泰 宗照  
勤労福祉センター 500円 10:00～14:00
- 1/19 多度津分会 月釜 席主：合田宗芳社中  
総合福祉センター2F 500円 10:00～15:00
- 2/9 丸亀分会 月釜 席主：為定宗友  
生涯学習センター 500円 10:00～15:00
- 3/1 善琴分会 月釜 席主：香舛会  
樟蔭軒 500円 9:00～14:00

**茶道裏千家淡交会高松支部 TEL (087) 841-0605**

- 12/8 年末チャリティー茶会 席主：高松青年部  
大西・アオイ記念館  
前売600円・当日700円 9:30～15:00
- 2/2 淡交会高松支部月釜 席主：河瀬宗知  
大西・アオイ記念館  
前売700円・当日800円 9:30～15:00

**石州流讃岐清水派石州会 TEL 090-2826-9229**

- 12/1 栗山奉賛茶会 席主：大林宗清・安部宗由  
牟礼町宮北公民館 500円 9:30～15:00
- 12/15 由佐城月釜茶会 席主：嶋崎宗代  
香南歴史民俗郷土館2F  
前売400円・当日500円 9:30～14:00
- 1/3 東讃茶道懇話会月釜 席主：山崎宗壽  
池戸西徳寺 書院 600円 9:00～15:30

**東讃茶道懇話会 TEL (087) 898-0391**

- 1/3 月釜 席主：石州流 山崎可寿子  
池戸西徳寺 600円 9:00～15:30

**武者小路千家香川官休会 TEL (087) 851-2258**

- 1/19 香川官休会月釜 席主：多田よう子  
無量寿院 700円 9:00～15:00

**高松市香南歴史民俗郷土館 TEL (087) 879-0717**

- 〈由佐城月釜茶会〉第2研修室(和室) 500円 9:30～14:30
- 12/15 席主：嶋崎宗代(讃岐清水派石州会)
- 2/16 席主：東山宗智(裏千家溝内宗玲社中)

**大西・アオイ記念財団 TEL (087) 880-7888**

- 12/22 大西・アオイ高校茶会 席主：大手前高松高等学校  
前売300円・当日400円 10:00～14:00
- 1/13 大西・アオイ高校茶会 席主：三木高等学校  
前売300円・当日400円 10:00～
- 2/16 きさらぎ茶会 席主：高松市茶華道協会 700円
- 2/23 大西・アオイ花茶会  
席主：武者小路千家香川官休会 小池公江  
前売700円・当日800円 9:00～15:00

**中條文化振興財団 TEL (087) 826-3355**

- 1/5 初釜 8,000円  
席主：武者小路千家 三好宇太郎  
以上の茶会はいずれも点心席を含みます。  
詳細は、財団行事予定をご覧ください。

「おいでまい香川」では、香川県内の  
様々なイベント情報を随時更新中！  
<https://oidemai.kagawa.jp/>



財団の設立記念日にあたる十月一日(火)に、令和元年度財団賞授賞式及び助成金交付団体認定書授与式を開催しました。

長年にわたり地域文化の振興に貢献された方々の功績を称えた「財団賞」には、大川念仏踊保存会(仲多度郡まんのう町)と松原太鼓保存会(東かがわ市)が受賞され、藤川代表理事より賞状及び奨励金を贈呈致しました。

助成金交付認定を受けている鬼ヶ島文化村、高松東部商店振興会、垂水神社湯立神楽保存会、熱帯JAZZ楽団を香川に呼ぶ会には、認定書が授与されました。

式典終了後の懇親会では、皆様の活動状況についてお話を伺いました。

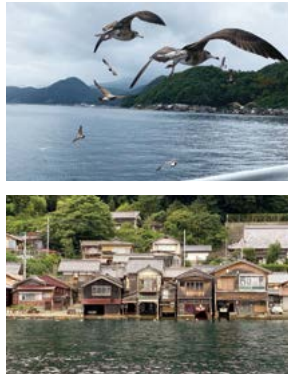
中條文化振興財団  
文化活動奨励事業

秋の

## 晴友会研修旅行

今年の晴友会研修旅行は10月8、9日の一泊バスツアーで、京都北部の伊根と京丹後市の和久傳の森を探訪しました。

日本海の荒波を和ませて港を守る若狭湾内で、更に海に背を向けて、集落を山懐にやさしく囲った伊根の風情は穏やかで、訪れた私たちの時間を止めるかのよう。伊根湾内を一周する観光船に群がってくるカモメたちに驚かされながら、静かな海面に写り込む舟屋の連続する景色を楽しんだ後は、お定まりのお土産探しのぶらぶら歩き。思い思いに伊根を満喫した我々を乗せてバスはすぐ近くの温泉旅館に早めの到着。海辺の宿のおもてなしは魚尽くしの宴会形式、これぞ団体旅行といった親睦の雰囲気であいあいの一晩を過ごしました。新涼の夜空には「オリ



オンは高みに空の冬支度」、残暑を嘆く間にも秋の気配津々、季節の正確な営みに驚かされたりもしました。

翌日は今年6月にオープンしたばかりの和久傳の森で自然の光や風を存分に楽しみました。京都の老舗料亭和久傳が創業地に人工の森を作り、安藤忠雄設計による絵本作家の「森の中の家・安野光雅館」を開設し、敷地内の田んぼや畑で採れた米や野菜でランチを提供するレストランを併設しています。閉鎖的なアプローチを抜けて館内に入ると一転して横長いワンフロアの解放

感。そこに女将が蒐集した水彩画を中心とした展示のメルヘンな世界。さらに広い芝生の庭越しに大きな三角屋根の食堂棟といった配置。穏やかな光にあふれた、心地よい風の通る広々とした空間に身も心も癒されたひとときでした。

今回はいつもとちょっと違った、お茶にこだわらないコースでしたが、日本の原風景をいろいろな形で楽しんでもいただいた趣向がうけたようで安堵しました。来年は…また素敵な企画でご案内したいと思います。

令和2年度  
助成金応募受付中

## ● 対象事業

令和2年4月1日から令和3年3月31日までに実施予定の文化事業。  
詳しくは助成基準をご覧ください。

## ● 応募の方法

財団所定の助成金交付申請書を提出してください。(HP参照)

## 応募締切は、令和2年1月末日。

審議委員会による書類審査を行い、必要があればプレゼンテーションを開催。令和2年3月末までに結果をご連絡致します。

## ● 助成金

30万円を限度とし、活動に応じた金額を審議委員会が決定致します。

助成基準、所定の申請書等は、当財団ホームページよりご確認いただくか、事務局までお問合せ下さい。

<https://chujo-zaidan.or.jp>

## 編集後記

三年ぶりに開催された瀬戸内芸術祭とも重なり、今年も多く外国人が香川を訪れているとのニュースがありました。確かに、街中でも交通機関の中でもキャリアバッグを引く姿やバックパッカーの人たちをよく見かけました。また、観光案内ガイドのボランティアをしている方は、案内するグループの六〇七割が外国人だと教えてくださった。

名所旧跡だけでなく、商店街や脇道に入った所でも写真を撮っている姿も見られましたが、店構えや看板などを外国の方々はどう感じているのでしょうか？ 生活している私達には、何でもない見慣れた風景に魅力があるのかもしれないですね。

私達も外出時には慣れた道ではなくコースを変えるのも良いのではないのでしょうか。新しい気つきとの出会いを楽しみにして。

「声・情報お寄せください」

〒760-0017  
高松市番町二丁目一十二  
公益財団法人中條文化振興財団編集部  
TEL(087)826-3355  
FAX(087)826-2212  
info@chujo-zaidan.or.jp